進路の選択についての一考察

松橋　賢一（高 35 期）
東日本旅客鉄道(株)執行役員安全企画部長
東京大学大学院工学系研究科修了

在校生のみなさん、こんにちは。この手紙では、私自身が進路の選択をどのようにしてきたかを伝えていこうと思う。

人間は未来を知ることができない。となると、その時点でわかっていることを基に考えて選択するしかなく、別の選択肢を取った時にどのような結果になったかはタイムマシンの無い現状では知りようがないということになる。つまり、戻れない選択をした時には、それはもう所与の条件に変わっており、受け入れるしかないという状況に変わる。平凡なサラリーマンの私の選択はいわゆる「人生の選択」と言うほど大それたものではないかも知れないが、それ故にみなさんの参考になることもあるかも知れない。しばし、お付き合いを。

１．どうやって大学を決めたか

私の立高時代は、野球とキャンバスがほぼ全てであった。野球は野球部であり、キャンバスとは今の校舎ができる前、体育祭の時にチームごとに建てていた巨大(幅 14m、高 4m)な張りぼてのことである。野球は朝から自主練だし、キャンバスは 4 カ月にわたる設計から個別の部材に落とし込んでの図面描き、のこぎり、釘、トンカチ、針金、丸太、綱、紙と糊を駆使しての製作であり、要するに授業に出ている暇がないわけで、通信簿の出席欄に赤が付いていた（つまりこのままいくと落第だよ、という警告）くらい。3 年の夏の甲子園の予選と最後のキャンバスが終わった時にはもう秋が来ていた。はて、どの学部・大学を受験するか。一応理系クラスに入っていたのだが、漠然と大きな仕事をするなら法律関係かな、とも悩み始めた。そこで尊敬する物理の大矢先生にどうしたものか、と相談した所、「まあ、せっかく物理やったんだから今年は理系で受けて、来年考えればいいんじゃない」と。そっか、どうせ浪人するんだからそのとおりだと、ならば好きな機械がいじれそうな機械工学科、入学時から学科の決まる京都大学を受けるか、当時到来していた漫才ブームの影響で関西に住むことに興味もあったし、と軽く判断した。結果、模試で一度も B 判定も出ていなかったのに合格した。そんなもので進学なんて決まってしまうのである。

4 年間ロクに勉強しなかったので、院試には当然落ちた。浪人したつもりで留年し、翌年、京大に加え野球部で東大に行った友人から過去問を入手した東大の大学院も受けたら、両方合格した。東大のドイツ語の試験は辞書の持ち込み不可、長文和訳の中でただ一つだけわかった単語は Wörterbuch という単語だけ。そういえば辞書の背中に書いてあったな、と「辞書」とだけ書いた。いい加減なものである。面接で 20 人以上の教授たちに囲まれて「君はどっちに来るのか」と責められたので京都の先生に電話して聞いたところ「環境を変えてみるのもいいんじゃない」と言うので東大に。まったくいい加減なものである。

２．どうやって就職を決めたか

軽い気持ちで来たものの修士論文が結構たいへんで、某自動車会社との共同研究でエンジンの軸受

の実験と数値解析をやる。その中で、もう研究職はムリ、就職は機械のユーザー会社にしよう、と考えるようになった。コツコツと仮説と事実を積み上げる研究職より実業の方が向いていると思ったからだが、研究に没頭したからこそ判断できたのだろう。幸い世はバブル時代、多くの企業を見学する中で、鉄道は昔から趣味にしていたし JR という会社ができたばかりで面白そう、ということで JR 東日本に。よく「趣味を仕事にするな」という議論は耳にするけれども、「好きこそモノの上手なれ」という話もある。要は、よく考えて判断し、一度決めたら後悔しない、ということだ。違う選択をした自分を妄想するのは楽しいけれども、妄想と後悔は区別しなければいけない。

３．どうやって会社人生を送ってきたか

採用の最終面接で、ある役員が入社後にやりたいことを問うので、「通勤通学で全員が着席できるようにしたい」と言ったら「君は私の会社をつぶす気か」と怒られた。が、その系統の仕事をするということになり、まずは現場を知る意味で数年間関係する現場の仕事についた。立川駅で改札をしている時に、敬愛する高 3 の時の担任の小島先生の定期券を拝見したこともある（当時は自動改札はなかったので！）。総武線の車掌や中央線の運転士もした。会社の中での仕事は、本人希望や適性のほかに会社の事情（要員の数や上司の判断、空きのタイミングなど）もあって、希望通りにいくことは少ないけれども、いろんな職を経験する中で全体が見えてくるし、社内外に人間関係も広がるし、異動の多い日本的人事運用も悪くないな、と思っている。ちなみに今やっている安全関係の仕事は鉄道の全ての基礎となるもので、これが無ければ全員着席もへったくれもないし、やりがいのあるものだ。というか入社後の仕事では一番長く 10 年もやっている。たまたま転勤してきて始めた仕事ではあるが、そんな出会い方ができるのも大きな企業のいいところではある。

車掌をする筆者

ついでに仕事についてひとこと言わせてもらうと、どんな仕事も選択、つまり判断の連続だ。この商品を出すのかどうか、この安全ルールを変えるのがいいのかどうか。失敗できない判断もあるが、判断期限までに集められる情報を可能な限り集めて、判断するときはしなければならない。そんなときに大切なのは専門知識だけでなく、人脈、そして教養（リベラルアーツ）である。全体を見渡し、自分に都合のいいことに偏らないことが必要だからだ。

人間は未来を知ることができない、同じ理屈で選択に失敗したかどうかはわからない。そんな見本？のような私の経験を語ってきた。いい加減に見えるかも知れないが、人生なんてそんなもので、所与の条件の中でどう楽しむか、ということである。この 15 年ほど、地元の国立で小学校の同級生を中心に町おこしのボランティアや地域のお祭りを主催・参加したりもしている。決して仕事だけが人生の全てではない。また、繰り返しになるがリベラルアーツが判断をする時に極めて大切で、決して専門だけが知識の全てではない。私は専門書と文学や歴史の本は交互に読んでいる。鉄道の安全の専門書を読むだけでなく、涙腺を掃除したくなったら浅田次郎を読むと言う具合に。

以上、駄文にお付き合いいただきありがとうございます。少しでもお役に立てたとするならば幸いです。みなさんが心豊かな人生を送れますよう、祈念しています。